

みても餘りある時間と心の餘裕とを犠牲にして、一途に學術發達の爲に敢てかゝる煩雜な事に任ぜられた尊き心構に對して、深甚なる感謝を捧げなければならぬ。

四月十三日午後、東京雜司ヶ谷の博士の墓に詣でた。歛葬後間もない墓地の所在は、東洋文庫の岩井君から仔細に聽いておいたので、譯なくわかる積りであつたのが、目標として心得ておいた小路の眞中に聳えて居る筈の櫛の木が、あちらの小路にもこちらの小路にも同じやうに亭々と立つてゐるので、何れをそれと定め難く、汗を拭ひながら彷徨徘徊する間に、曾て博士と桑原博士との間に行はれた大宛國の都貴山城の位置についての激しい論争の一節をふツと思ひ出しておかしくなつた。貴山城を水攻にして陥れたといふのを根據の一ツとして、地勢上からこれをホージェンドにあてるのと、そんな地勢は大宛地方の何れの都にも認められるところであるから、據とするに足らないといふことである。貴山城は兎も角もとして博士の墓地は容易にわからない。遂に我を折つて附近の茶屋について聞き合せて見ると、これはまた萬を以て數へられる墓域内の幽籍を掌を指すが如くに心得て居つて、その主婦が先に立つて案内をしてくれた。來て見れば先刻からその附近を何度か往來模索した櫛の若葉の蔭さすところである。白鳥庫吉墓と記された加藤博士の健筆の木標の下に、今は悲しくも博士の英魂は永遠の眠に就いて居られるのである。訪問の度ごとに莞爾として迎へてくれた温容に接する思で墓前に額き、一世に卓立せられた學徳を今更に追想しながら、謹しむで冥福をいのり上げた。

(東洋史研究第七卷第二・三號、昭和十七年七月)